

# 小体研

## Physical education

2020年(令和2年)

12月2日(水)

◇第5号◇

八重山地区小学校体育研究会  
広報誌

八重山地区小学校体育研究会の発足にあたり、尽力された諸先生方のこれまでの活動等をアーカイブとして残していくために、文章を寄せて頂きました。吉濱剛先生による3回目の寄稿です。  
小体研寄稿③(全4回)

### 私と体育授業

八重山地区小学校体育研究会  
相談役 吉濱 剛

運動会は小学校では欠かせない体育的行事になっていますが、新型コロナウイルス感染の広がりでの様子も一変した感があります。

運動会というと、前日からテントの場所取りが始まり、家族や親族も応援に駆けつけて、昼食時には演技等で頑張った子どもたちを迎えてご馳走を囲い、家族、親族の団らん場となっていました。

私が運動会種目に地域行事を意識したのは、嘉手納の初任校でエイサーに取り組んだ経験がとても感動的だったからです。まだ、子どもエイサーがない頃、地域の協力を得て指導していただき運動会で披露したときのことです。祖父母は、かつて自分が体験した地域のエイサーを孫が演じている姿にテント内は総立ちになり、涙を浮かべて声援を送っていました。その体験から、運動会で地域の伝統を子どもなりに披露することは、地域と学校を繋ぐ接着剤になると確信しました。

西表小学校では、新しい文化として運動会でエイサーを取り入れ、石垣市に転動してからは、赴任校の地域行事を運動会に取り入れるものがないか取材をするようにしていました。

登野城小学校では、手作りの旗頭とエイサーをアレンジして豊年祭の太鼓のリズムを入れて創作しました。また、ハーリー競漕を一日取材し、陸上で転覆をどう表現するか相談して工夫し、ナバニ(舟)を竹で骨組みを作り、紙を何重にも貼り合わせて製作しました。

平真小学校では、豊年祭に行われる綱引きの取材し、男綱と女綱を保護者に協力してもらい、地域行事の流れでドラの音に合わせて入場し、ツナヌミンで盛り上がり、綱引きの後、ガーリー(踊り)をして喜びの表現を取り入れると、単純な綱引きがドラマのような展開になり感動を呼びました。

石垣小学校では、石小丸の全校表現を見直して豊年祭を取材し、奉納舞踊や獅子舞、棒術など子どもが演じる豊年祭を表現しました。その後、石垣島祭りのパレードに全児童で参加し運動会の豊年祭を再現しました。

大浜小学校では、地域住民なら誰でも体験した「みんなで遊ぼう」という全児童表現が伝統的にありましたが、赴任した1年目は、ほぼ子どもたちだけで表現していました。歌詞、曲と表現する動きにどんな関連があるのか、不自然な点が幾つか感じられました。そこで、「みんなで遊ぼう」をその当時の識名校長に依頼され、曲を選定した東京在の赤嶺さんが豊年祭で帰省なされた折りに、その思いや経緯について取材しました。

演技を依頼した校長は、戦争マラリアで教え子を失い、「ハテルマ、シキナ」と刻んだ教師でした。戦時中の暗い生活から戦後、親子で一緒に楽しめる種目を考えてくれと言われたそうです。曲の始めに子どもたちが無造作に手招きする動きをするのは、テントにいる大人に向かって「おいでおいで、一緒に遊ぼう」と呼び掛ける表現だと分かりました。そこから、みんなで遊ぼうが展開されていたのです。そのことを保護者や青年会に呼び掛けて、「みんなで遊ぼう」の思いを伝えました。翌年は、夏休みのラジオ体操後に練習を取り入れる地域分会も出てきて、青年会も積極的に協力してくれました。すると、運動場いっぱい広がる輪が幾重もできていたので、すかさず2階の体育館側からその光景を観ました。まさに、これが識名校長の思いであり、赤嶺さんが話されたことだと実感しました。

地域を取材すると、そこには地域のスピリット(魂)がありドラマがあります。そのことが共感と感動を呼び表現する側と会場が一体となり、「体育で地域と繋ぐ」「体育だから地域と繋げる」ことができ、開かれた学校、信頼される学校に繋がっていくのです。